

「桃の木」

茨城県 常田桃子

私の家の庭には、私が生まれた年に植えられた桃の木がある。私はその木と一緒に成長してきた。

その木に桃がなりはじめたのは、私が小学校に入るか入らないかくらいの時だった。まだその頃は小さな実が少しなっているくらいで、桃というより梅のようだったのを覚えている。私も同じ頃小さくていろいろな種類の知識の実が少しずつなりはじめていた。段々と年を重ねていくと私も桃の木も大きくなっていった。私は身長がのび、私の中で実っている実も小さい頃とは違い種類も数も増え、一つ一つがしっかりとしたものになりつつあった。桃の木も随分と大きくなり、食べれる程ではないが実も大きくなっていった。

私が小学校を卒業し、中学校に入った年になった桃は少しあまく、充分食べられるものになっていた。一方、私はまだ学校に慣れず部活も勉強もうまくいっていなかった。だから桃のようにしっかりとした実はできていなく不十分なものだった。「私は家族、友達などに支えられがんばっているのになぜ桃の木の方がしっかりとしているのだろう。桃は勝手に育っているだけなのに。」悔しい気持ちと同時に疑問もうまれてきた。

ある日ふと桃の木を見てみるとじいちゃんが桃の木の手入れをしている。じいちゃんは毎年手入れをかかさずしてくれている。桃の木も私と同じように支えてくれる人がいた。勝手に育っているわけじゃなくて支えられて桃の木もがんばっていた。そう思うと負けてられないとがんばる気力がわいてきた。

そして今年、桃の木は去年よりあまく、おいしい桃を実らせた。私は去年よりも勉強、部活共にがんばったが桃の木には負けてしまったと思う。

これから先桃の木はもっとおいしい桃を実らせていくと思う。だから私もしっかりとした実を私の中で実らせていきたい。同い年のこの桃の木は私の良きライバルである。